

Title	社会人類学における動態理論
Sub Title	On dynamic theories in British social anthropology
Author	平野, 敏政(Hirana, Toshimasa)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1972
Jtitle	哲學 No.60 (1972. 12) ,p.83- 108
JaLC DOI	
Abstract	<p>I try to examine dynamic theories in British social anthropology, especially in works written by B. Malinowski, A. R. Radcliffe-Brown and R. Firth. On the one hand, Molinowski criticized 'diffusionism' which had been insisted by W. T. Perry and E. Smith, denying their reconstruction of history and their inclination to the origin hunting, and so on. On the other hand, we can regard his theory as a kind of diffusion theory. But the characteristic which I think very important in his theory is his emphasis upon psychological realities or powers, i. e. psychological point of view, and his revaluation of surviving historical residues. Radcliffe-Brown laid stress on the concept of structure, since he took a sociological point of view. He offered a comparative analysis of social structure. Thus he divided the study of social structure into three divisions. He said as follows: 'There is a third, the investigation of the processes by which social structures change, of how new forms of structures come into existence.' Both the concept of structure and the notion of structural change have far reaching theoretical influences. Along these lines, Firth presents the organizational aspect of social relations in addition to structural and functional aspects. He thinks organizational aspect as it is the necessary complement to the analysis of the structural aspect and it helps to give a more dynamic treatment. Fathermore he points out that the organizational aspect implies personal evaluations and selections. In relatiaoa to what mentioned above, he makes clear the difference between structural and organizational change. Therefore we must examine in the first place the organizational change because of its characteristic of humanistic coefficient.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000060-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会人類学における動態理論

平 野 敏 政

(一)

機能主義社会（文化）人類学は、社会生活の諸部門おのおのが、経験的に類別的な形態をもっている、という観察的事実にその基礎を置いている。従って機能主義社会人類学にあっては、下向的には、例えば A. R. ラドクリフ＝ブラウンの主張にみられるように全体的な社会生活の「存在の必要条件」と経済、政治、教育、宗教等といった諸部門との間に存在する関係の在り方の解明、上向的には、例えば B. マリノフスキーの文化の理論にみられるごとき人間の生物学的欲求と、社会的、文化的諸装置との関係およびそれら装置の統合的全体としての相互関連の理解が第一義的課題として措定されたのである。

この場合、研究対象である特定の社会の時間軸切片は、観察者の観察時点（現在）に固定され、その上で空間軸上での社会生活の諸部門の相互関係、さらには全体的な社会生活との間の関係構造の分析に社会人類学の主たる焦点が置かれたのは当然の論理的帰結といえる。

時間軸切片を現在に固定するというこの論理的帰結は、同時に存在する諸社会事象の空間軸上での値（特徴）を、時間軸継列の値（特徴）に置換しようとする進化主義人類学や、同時的に存在する事物の空間上の輻湊関係を時継列に読み直す伝播主義人類学への批判的意味ばかりでなく、「異なる文化の論理」の理解という点において方法的な有意味性を主張するものであった。より方法論的な術語に換言していえば、いわゆる共時論的な社会、文化事象の分析をそのあるべき位相に止めることを含意していたといえる。

社会人類学者が、かかる共時論的立場をとる場合、そこには少なくとも二つの前提が存在している。一つは、社会の維持、存続を方法的な位相においてはそれ自体無矛盾的で自動的なものとする事、他の一つは、社会的諸部門およびそれを含む総体としての社会の両者それぞれを、特定の機構と秩序をもった統合的全体として措定すること、この二つである。以上二つの前提のうち、後者については、それからの系として、社会的諸部門の区別の基準の問題や、社会的諸部門相互の関係およびそれら諸部門の統合的全体としての社会構成の在り方の問題などが導出されるけれども、言明そのものとしては社会事象の形態の形式性に関わるものであって、この前提の主要な問題性は、むしろ系として導出した具体的な課題に求められるのである。

これに対して、前者すなわち「社会の維持、存続を自動的なもの」とする前提は、前提そのものに問題性を残している。この前提は具体的な社会過程の機能を、観察的な結果性から逆算して決定するという機能主義理論の論理的特性と結びついている。そしてこの観察的な結果性だけからすれば、社会の維持、存続は自動的なものとして措定されざるを得ない。しかし、はたして社会の維持、存在は自動的なものなのだろうか。対象を純粹に客体として切り離す観察性を越えて、経験的あるいは具体的——対象そのものの概念的把握——に対象を把握しようとする場合には以上のごとき言明は妥当しない。

このことは C. レヴィ=ストロースのいう「階級の分化が休みなく促され、それによって社会が生成し、そこから社会のエネルギーが引き出されている」⁽¹⁾「熱い社会」はいうに及ばず、「内的環境が歴史という温度計の零度に近い」⁽²⁾「冷たい社会」についても同断である。

例えば、R. フェースはティコピア (Tikopia) の族長制について次のようなことを報告している。

1929年のティコピアでは四つの氏族 (Kafica, Tafua, Taumako, Fan-

garere) が存在し、おのおのが族長をもっていた。1952年の調査でもこの四つの氏族に異動はなかった。しかし族長の地位継承をめぐる Káfica において興味ある事実がみられた。Káfica では 1929 年から 1952 年に至るまで、一人の Ariki Káfica の統治が続いていた。Ariki Káfica はすでに高齢であり、その統治があまりにも長すぎることに、また、もうその地位を譲ってもよいということ、衆人の認めるところであった。こうした状況のもとで Ariki Káfica の長子（男子）であり、当然の地位継承者とみられていた Pa Fenuatara の長男が突然、瀕死の病気になった。他の氏族の族長達もその枕辺に集まっているところで、神がかりの口を通して Ariki Káfica の祖先である聖霊が、「Pa Fenuatara の長男の病気は Ariki Káfica が長生きしすぎていることに対する怒りに原因がある」と告げた。さらに聖霊は Pa Fenuatara は Ariki Káfica の健康の維持に努力しすぎているとして Pa Fenuatara に Ariki Káfica に食物などを提供することを止め、彼を死に至らしめよと命じた。

しかしこの命令に対して Pa Fenuatara は、族長の継承者として父の死を早めることより、息子としての義務を選ぶこと、もしそれが叶わなければ自分の息子と海へ出て自殺すると答えた。この断固たる答えに聖霊は折れ、Pa Fenuatara の息子の病は本復し、事態が平常にもどったというのである。⁽³⁾

ファースによれば、ティコピアの族長の継承は、族長の長子（男子）——男子が一人であればその男子——が世襲するのが通常の状態と考えられる。おそらくティコピアの氏族制はこうした制度的手続で族長継承を、ひいては氏族制そのものの維持、存続を自動的なものとしようとしているのであろう。しかしそこには制度的手続だけでは処理しきれない不確定な要素が含まれている。ここに挙げた例についていえば、その不確定な要素の一つの重要なものは、人間の生命の長さと考えられる。

それでもなお、人間の生命の長さという不確定の要素に対する社会の側

からの適合的な処理の手續が存在しないわけではない。ファースは、Ariki Kafica の息子である Pa Fenuatara の齒が抜け始めており、そのことから判断すれば Ariki Kafica はもう死ぬべき時だし、Pa Fenuatara に地位を譲るべきだと Ariki Tafua が述べていたこと、さらに Ariki Tafua の父は死ぬことを選び、食物をとろうとしなかったと Ariki Tafua が述べたことを報告している⁽⁴⁾。しかしこうした意見は確かにティコピアにおいては一般的なものであるが、その強制力はそれ程強いものではないらしく、一人の族長が Ariki Kafica のごとく生に執着した場合には、族長制は挑戦を受けることになる。そしてこの場合には、すでにみた様に Pa Fenuatara 個人の決断によってディレンマが克服され、族長制が維持されるのである。

ここに挙げた例に即していえば、確かに社会の維持、存続は個人の選択、意志決定に負うところをもっており、自動的なものとなることはできない。しかしこの場合ではそうした決定、選択も結局は累積的なくり返しの結果に終わっている。

しかし 1952 年の調査ではもう一つ驚くべき事実が報告されている。Kafica ではすでにみた様に 1929 年当時の族長が依然としてその地位にあった。Tafua——族長は 1929 年の数年前にキリスト教に改宗していた——においては、族長の長子（男子）がその地位を継承し、さらに 1950 年ごろにこの長子の唯一人の息子にその地位が譲られていた。Taumako でもやはり族長の長子（男子）が新しい族長となっていた。また族長の帰依する宗教についても 1929 年当時——土着宗教への帰依——と変化はなかった。ところが Fangarere では、先きの族長がキリスト教に改宗したために、その地位は 1952 年にはキリスト教者である族長とそうでない族長の二人によって継承されていた⁽⁵⁾、というのである。

長子（男子）相続を原則とするティコピアの族長継承制度の形態からすれば、Fangarere にみられる二人の族長は異例のことである。ここで

注目しなければならないのは、Fangarere では先きの族長がキリスト教に改宗したという事実と、Tafua では三代にわたる族長がすべてキリスト教徒であったという事実である。Tafua における族長のキリスト教への改宗（1929 年以前）前後の族長の地位継承をめぐるの事情を知ることはできないが、しかしこの二つの例からみるならば、少なくともそこにはキリスト教との接触を通して、族長の地位継承に従来は意識されていなかったと考えられる宗教的素因が、制度的規準として導入されたいということが推測されるのである。

Fangarere のごとくキリスト教者の族長とそうでない宗教を信ずる族長の二人の族長をもつか、Tafua のようにキリスト教者の族長だけをもつかということに関しては、宗教的素因と同時にその他の諸条件を考えるのが妥当であろう。いまこのことに詳細な検討を加える余裕はないが、これまで論じてきたことを基礎にしていえば、Kafica の例においてみたように、同一の族長制度の維持といえども、自動的なものではなく、またこの社会の維持、存続を自動化しようとする制度的規準さえも Tafua や Fangarere の事例から考察したように、そこに変化、変動をうかがい知ることができるのである。

しかも接触的事実の影響によるとはいえ、Kafica にみられるごとき制度の維持も Tafua や Fangarere にみられる制度の変化、変動も元来は制度の維持を志向する内的形成力によってもたらされたものと理解されるのである。従って社会（文化）の動態的理論は、こうした現実的な過程の観察的水準での把握に止まるのではなく、その重層的な在り方を分析し、そこに存在する主要な規定的素因を明らかにし、過程のいわば本質的なメカニズムの概念的把握を目指すものでなければならないだろう。

(二)

こうした接触的事実のもつ影響や社会文化の変動の問題が、フェースを

俟つまでもなく、初期の機能主義社会人類学においても、一つは経験的なフィールド・ワークの中で認識され、一つは植民地統治の政策的な要請と結びついた応用人類学の主張の中で取り上げられ、論じられていた。

まずマリノフスキーの所論についてみてみよう。彼は次のように言っている。

文化変動は、それによって既存の社会秩序、つまりその社会の社会的、精神的、物質的文明が、一つの型から他の型へ移行することである。(中略) この文化変動には、社会 (community) の中で自然発生的に生じる力や素因によるものと、異なる文化との接触によって生じるものがある。前者は独立的進化 (independent evolution) の形をとるものであり、後者は通常、人類学において伝播 (diffusion) と呼ばれている過程である。(中略) われわれの眼前に起っている文化変動に関する観察は、われわれに伝播の一般法則を明らかにしてくれる。(中略) 約言すれば過程の動態的 (dynamic) な性格を理解するための素材を提供してくれるのである。⁽⁶⁾

マリノフスキーは、まず文化変動を「独立的進化」と「伝播」の二つに区分する。そしてそのうちの「伝播の一般法則」と文化(社会)の動態的理論とを同致している。マリノフスキーの動態論はいわば一種の伝播論とみることができる。しかし彼の「伝播論」は W. J. ペリー や E. スミスなどの主張した伝播論とはいくつかの根本的な点において異なっている。まず第一の点は、ペリーなどが伝播的關係の決定を通して過去の歴史の再構成を企てるのに対して、マリノフスキーはこれを否定し、現在眼前に起っている事実の観察に目的を限定していること。第二には、「起源探索」に重点を置き、全世界的にみられる類似的事象をその起源からの伝播ということによって説明しようとするのに対して、「起源探索」の意味を認めないこと。第三は、従来の伝播論が、伝播される単位を文化特性あるいは特性複合としていたのに対して、これを組織された体系あるいは制度と

した点、第四は、「借用」といった仮説では、伝播的状况の中に含まれている「衝撃」や「反作用」などを無視することになるとして、伝播の受容側における反応を考慮すべきことを主張した点などが挙げられる。⁽⁷⁾

以上に挙げた諸点を基礎として、マリノフスキーは最終的には彼の「伝播論」を（一）より高度な文化からの衝撃、（二）土着文化の本質、（三）二つの文化間の反応から生じる自律的変動 (autonomous change) の現象、の三つの位相に区分する。⁽⁷⁾ 換言すれば、伝播の問題を、接触促進者 (contact agency)、受容する側の受容的条件、接触的状况からの自律的変動の所産の三つの側面に整理している。

そこでこのように整理される「伝播論」と文化（社会）の動態的理論とのマリノフスキーの同致についてみてみよう。

接触促進者についてはみたように「より高度な文化」があげられている。つまりヨーロッパ文化が接触促進者と規定されているのであるが、ヨーロッパ文化が促進者であったという事実は、グローバルな見地からすれば、それは19世紀、20世紀にかけてのヨーロッパ資本主義の進展の必然的帰結だったのであり、また土着文化の側からすれば接触的事実は偶然的事実にすぎないのである。また文化変動を一つの型から他の型への移行と定義するならば、型の移行の機会を構成する要素としての促進者は必ずしもより高度な文化である必要はない。⁽⁹⁾ 確かに接触的事実の重要性は認めうるけれども、接触促進者をより高度の文化の側に固定することは支持することができない。

次に接触的事実の所産について触れてみたいのだが、ここでふたたび先きに挙げたティコピアの例をみてみよう。そこにおける族長制度の変化はすでにみたようにキリスト教との接触的事実——広くいえばヨーロッパ文化との接触的事実——によってもたらされたものと理解することが出来る。しかし Tafua と Fangarere との差異、すなわち前者はキリスト教者である一人の族長をもつが、後者はキリスト教者とそうでない族長の二人

の族長をもつに至った事情を、この接触的事実のみから説明することができだろうか。詳しい資料がないので断言できないが、本来は同じ型の族長制度をもっていたと考えられるこれらの氏族が、接触的状况下で Kafica や Taumako は従前の型を保持し、Tafua や Fangarere では族長制が変化をみせている事実は——Fangarere の二人の族長制は、Tafua のような形態への過渡的形態であるのかもしれないが——接触的契機が各氏族の内部環境の中で把捉され、内的環境の諸条件との相互作用の結果と考えなければならないのではないだろうか。そしてそのためにマリノフスキーは、受容側の受容的条件や自律的な変化ということを主張しているわけである。

ヨーロッパ風の服装の伝播を例にしてマリノフスキーはこうした事実について、

ヨーロッパ風の服装の採用は「分離された特性」からの結果としてではなく、組織化された過程の結果としてあるのである。もしわれわれがこうした事実を理解しようとするならば、われわれは全的心理 (whole psychology)——すなわち、アフリカ人の側からするこの過程に対する部分的変形のはっきりしたプログラムの中や、ヨーロッパの優越性と権威への服従の中や、さまざまな制度の中で作用している心理——と同様に、ヨーロッパ側の商業、職業紹介所 (employ agencies) というものについてもまた考慮しなければならない。⁽¹⁰⁾

と言っている。このマリノフスキーの見解の重点は、ヨーロッパ側の商業、職業紹介所の考慮の必要性を強調することにあるけれども、このことは逆に、接触的事実の所産については「全的心理」の形成力を、いわば自明の理のごとくにマリノフスキーが置いていることを示すものといえるのではなかろうか。そしてこの「全的心理」の形成力に関連して、接触的事実を受容する側の条件が当然問題となる。

内的環境の側の形成力としての「全的心理」と、それを条件づける素因

をめぐる見解を、マリノフスキーはL.メアーの所論との対比によって明らかにしている。メアーは社会人類学の方法において機能的方法と歴史的方法を区別し、それを基礎に歴史(変動)研究の中に「変動のゼロポイント」(zero point of change)という考え方を導入していた。マリノフスキーはこのメアーの「変動のゼロポイント」という状況は、すでに過去のものとなってしまう死んだ要素、すなわちいわば無機的な要素からのみ構成されざるを得ないのであり、この状況の再構成が形成力に対する条件的要素を明らかにし得ないことを鋭く指摘している。「変動のゼロポイント」の探究にかえて彼は、現在の状況に影響を与えている生々した「歴史的残基の残存」という先行する装置化された文化の要素を明らかにすることを要請するのである。⁽¹¹⁾

マリノフスキーのこの要請は、今日のいわゆる機能的自律性の主張の一手前までできているものといえる。何故なら先行する文化の要素が「残存」し得るのは、それらの要素が相対的に機能的自律性を獲得あるいは保持していたからと理解されるべきはずのものだからであり、しかも彼はこの「残存」がもつ形成力に対する条件的作用を積極的に認めているのである。明らかにマリノフスキーは「装置化されたもの」の固有の運動法則と、それら装置化されたものと情况的な形成力として把握された「全的心理」との関係構造の両者に目を向ける必要を要請していたのである。

そしてこのように定着されたこれらの問題性は、今日まで持続して動態的理論の課題として残されたのである。事実マリノフスキーの提出したこのような動態的理論の可能性が、それが直接的に継承されたというわけではないが、M. グラックマンなどの心理学的素因の形成力への着目、ひいては心理学的人類学の主張へと結びついているのである。⁽¹²⁾

(三)

接触的事実に注目し、そこから文化の変動を分析、記述すべきことを強

調していたマリノフスキーに対してラドクリフ＝ブラウンは、マリノフスキーの方法は現実を避けて通ろうとするものにすぎない、といった意味のことを記して冷たい反応を示している。では一体マリノフスキーの方法に対するラドクリフ＝ブラウンの不满は何だったのか

彼の見解は、

文化接触と呼ばれているこの種の変化を取り扱うことが、一部の人類学者達の間で最近流行となっている。この文化接触という術語によって、異なる社会生活の形式、制度、慣習、観念をもっている二つの社会、集団、階級、地域の間の一方向的、あるいは相互的作用の効果を理解することができる。こうした観点からすれば、18世紀においては大英帝国とフランスとの間に理念の交換が、19世紀においては、イギリスとフランスに対するドイツ思想の顕著な影響をみることができる。このような相互作用は、社会生活の通常の性質であることはもちろんであるが、しかしそれらが社会構造の顕著な変化を必ずしも意味するものではないのである。⁽¹⁸⁾

ということを基礎とするものであった。ラドクリフ＝ブラウンは、文化接触の研究は、社会構造の顕著な変化を必ずしも明らかにするものではないというのである。要するに彼のマリノフスキーに対する不满は、マリノフスキーの研究方法では社会の構造と、その構造の変動とがどの様に結びつくのか、その結びつき方各々を明らかにし得ないのではないかという点にある。

接触的相互作用は必ずしも社会構造の顕著な変化を意味するものとは限らないだろうというかかる不满の生じる根拠は、マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンの二人がもっていた理論的な戦略の差異からくるものである。すなわちマリノフスキーの戦略は、異なる文化の論理をそのものとして理解することにあつた。従って彼の所論においては、人間の生物学的欲求の充足を可能にもし、またその欲求を変形しもする一種の装置化された

もの——物質的，非物質的ものを含む——として統合的全体としての文化が把握されていた。そしてこの装置の中に社会構造も，他の要素と同等のものとして含まれていたのである。これに対してラドクリフ＝ブラウンは終生社会構造の分析，比較を通しての社会の一般法則，あるいは一般理論の定立をみずからの戦略としていたのである。

理論的な戦略のこのような差異が，前者が自分の研究を文化人類学と呼び，後者がそれを社会人類学と呼んでいたことや，前者が文化変動を，後者が社会変動を強調していた事実と結びついている。マリノフスキーの文化変動の理論が，限定付きの一種の伝播論であったことはすでにみた通りであるが，これに対しラドクリフ＝ブラウンは，この節の冒頭において述べたごとき冷たい反応を著した後に，

私は，進化とは新しい構造のタイプの発生を特に指示する術語と理解している。(中略) 私は言語や文化の進化といった言葉に正確な意味と定義を与えることはできないが，社会的進化は社会人類学者が認め研究すべき現実であると考えている。有機体の進化のようにそれは二つの特徴によって定義される。歴史的過程の中で，ごく少数の社会構造の形式から，多数の異なる形式が発生してくること，つまり多様化の過程が存在すること。第二に，この過程を通して，社会構造の複雑な形式が，単純な形式から発展してくるか，または単純な形式にとって替ることの二つである。⁽¹⁴⁾

と記している。ここからも明らかなように，ラドクリフ＝ブラウンは，有機体とのアナロジーによる進化論的立場をとっている。その場合，言語や文化はその進化ということについて正確な意味，定義を与えることができないという消極的な理由によって，問題領域から排除され，進化はもっぱら社会構造の形式のみに関与するものとされている。そしてこの様に限定された社会の進化と有機体の進化とが類推的に論じられているのである。しかし，先きに引用した部分からも，また他のラドクリフ＝ブラウン

の著作の中においても、かかるアナロジーの可能性に対する方法論的な根拠づけを発見することはできない。ただアナロジーは注意深く使用されねばならないという指摘と、有機体と社会とのアナロジーの成立し得ない二点の指摘がみられるのである。彼によればその二点とは、社会構造のもつタイプの可変性と、社会構造が機能性においてのみ観察される、ということの二つである⁽¹⁵⁾。

要するにラドクリフ＝ブラウンの場合、進化論的立場とはいっても、一応有機体と社会生活との差異は明らかにされた上でのことであるということができるのである。しかし、やはり次のごとき点においては、彼の進化論的立場は有機体とのアナロジーに大きく負っていると見ることができよう。

一般に社会学、人類学上の進化論の最大の特徴の一つとして、進化の段階論つまり継時的な段階論の構築、設定があげられる。これに対してラドクリフ＝ブラウンは、H. スペンサーの名をあげながら継時的な段階説を偽歴史的推測として進化論的立場からこれを除去すべきことを主張している⁽¹⁶⁾。彼は段階説に替えて、適応という概念を進化論的立場の説明、方法論の一つの重要な鍵概念として提示する。つまり社会は、有機体と同様に内的にも外的にも適応を行なわなければ存在し得ないものと主張し、その適応の過程の中に構造の変動——多様化と複雑化という進化——が現出するものと考えていたといえるのである。

ラドクリフ＝ブラウンは、社会が統合的全体として内的、外的環境に対して行う適応を、生態学的適応、(œcological adaptation)、制度的適応 (institutional adaptation)、文化的適応 (cultural adaptation) の三つに区分している⁽¹⁷⁾。進化論的発想の中から段階説を抜き去ってしまった以上、彼にあっては進化とはいわば外的、内的環境に対して open system としての統合的全体としての社会が、先きに挙げた三つの適応的過程を通して、その構造的なタイプを多様化し複雑化していく発展の傾向性を指示する術

語として理解されているといえよう。結局のところ、段階説を拒否したラドクリフ＝ブラウンの進化論的立場は、有機体とのアナロジーに依拠しつつ、外的、内的環境への適応の結果である社会のメタモルフォーシスと進化とを同致するものと理解することができる。

合法則性ではなく傾向性を、巨視的段階論ではなく適応的なメタモルフォーシスを、という彼のいわばピース・ミール (piece meal) なこの進化論的立場の中には、統合的全体としての社会が外的、内的環境との適応的過程をもつことや、社会変動を構造——彼自身の考える構造——の変動として把握しようとする主張など今日的な観点からみて興味ある指摘を発見できる。しかしかかる環境への適応的側面の強調は同時に維持的運動過程の強調へ結びつき易く、そこにおける異質なパターンをもたらすかも知れない可能性をもつ契機を看過し勝ちになる。事実、ラドクリフ＝ブラウンの所論の中には、マリノフスキーにみられたごとき「形成力」——これが維持的でもありまた、変動的でもあり得る可能性をもつことはいうまでもない——の考察はほとんど見ることができないのである。

しかし、変動を社会の構造の変動として把握しようとする主張は、構造概念そのものの問題性とならんでその後の社会人類学における動態的理論に大きな影響を与えている。

社会構造および構造概念についての考察については、イギリスの社会人類学をみただけでも、E. E. エヴァンス＝プリチャード、E. R. リーチ、R. フェース、S. F. ネイデルなどに各々特色をもった見解を見出すことができる程である。⁽¹⁸⁾ なかでも、マリノフスキー、ラドクリフ＝ブラウンの両者の所論に多くを負いながらも、従来の機能主義社会人類学が構造と機能の両概念のみを鍵概念としていることに対して、もう一つ的方法的な概念として組織概念を加えることを主張するフェースの所論は、注目に値するものの一つであろう。

(四)

機能主義理論がもっている理論的問題点については、多くの論稿を今日みることができる。一例を挙げるならば T. B. ボットモアの所論の機能主義理論の問題点をめぐる考察の中に代表的な例をみることが出来る。ボットモアはまず初期の機能主義理論——特にデュルケームやラドクリフ＝ブラウンの理論——にみられる有機体とのアナロジーの間に存在する問題点を、次の様な社会生活の特質の指摘とからめて明らかにしている。彼によれば有機体に対する社会生活の特質は、(一) 社会の構造は可變的である。(二) 評価的価値判断なしにしては社会の健全な状態、病的状態を決定することが不可能である。(三) 有機体の器官と機能の対応のごとき正確さで社会的行為、制度の機能を決定することが不可能である。ことの三点を挙げている。そしてさらにこうした難点から(一) 構造の変動を説明できない。(二) 多くの場合、維持的に貢献した社会的行為を決定することが困難である。(三) 特定の機能を特定の社会的行為に帰属させることが簡単にはできない。という問題点を指摘している。⁽¹⁹⁾

もちろん機能主義理論の問題点が以上の整理によって尽されているわけではない。しかし有機体とのアナロジーに依拠する立場をとるとき機能主義理論に関しては妥当な整理といえよう。いまここにボットモアの整理を借りて記した機能主義理論の問題点のすべてにファースの所論が明確な解答を提出しているわけではない。けれども「機能」についていえば、行為の文脈化の要請や、行為の結果、効果の強調と、それに結びつけられた構造的「関与」(concern)の主張など、今後さらに論議されるべき点が認められる。⁽²⁰⁾ 機能主義理論そのものの有効性を再検討しようとするような場合などは、ここに挙げた指摘を避けて通ることはできないだろう。また「構造」をめぐっては、構造と組織両概念の区別を提案し、そこから構造変動に接近しようとしている。⁽²¹⁾ そしてファース自身、かかる立場を

organizational method of analysis と呼んで、組織概念を中心的な鍵概念として次のごとき観点から、社会の動態的理論の樹立を目論んでいる。⁽²²⁾

社会関係の一定の領域を研究する場合、社会、文化、コミュニティーのいずれの概念を使用するとしても、われわれはそれら各々について構造、機能、組織を明らかにすることができる。これらはお互に分離されてはいるが、相互に関係する側面をもっている。これらのものは社会過程の十分な考察には不可欠なものである。簡単にいえば、社会関係の構造的側面によってわれわれは社会関係の形式 (form) がそれによってたっている原理を示し、機能的側面によって社会関係が目的に対して行う活動の方法を示し、組織の側面によって、社会関係の形式の維持と社会関係の目的遂行に方向づけられた活動を意味しているのである。⁽²³⁾

社会構造の研究は……基礎的社会関係の形式がいかにして変化可能であるかを検討することを必要とする。社会の持続とならんで社会の適応の研究もまた必要である。……社会的行為の組織的側面の分析は、構造的側面の分析にとって不可欠の補足的要素である。組織的側面の分析は、よりダイナミックな取り扱いの助けとなってくれるものである。⁽²⁴⁾

明らかにフェースは組織概念を、構造概念、機能概念と並ぶ第三の分析的な方法的概念として提示しようとしているのである。しかもここでの強調点は、構造的側面と組織的側面の区別、つまり構造概念と組織概念の明確な区別におかれている。

構造概念と組織概念の区別については、ラドクリフ＝ブラウンの所論の中にもみることが出来る。彼の主張の要点は、構造を「制度的に制御され、限定された関係の中の配置」とし、組織を「活動の配置」とするもの、すなわち構造を「地位の体系」とし、組織を「役割の体系」とするものであった。⁽²⁵⁾ しかしこのラドクリフ＝ブラウンの規定については、地位と役割との関係のし方を十分に検討していない点と関連して、組織は究極のところ、構造の機能性と同致されていたとみることができる。

経験的にみれば地位と役割が必ずしもコインの表裏の関係のごとくに等価の同致し得る関係を保持しているものとはいえない。具体的な社会生活の中においては、地位を役割に、役割を地位に直接的に翻訳し直すことはほとんど不可能なのであり、その間にはズレが存在しているのである。地位を役割に、役割を地位に直接的に翻訳し得るのは社会生活の極限的な抽象の位相においてのことなのである。従ってラドクリフ＝ブラウンのごとく構造を「地位の体系」、組織を構造の機能性である「役割の体系」と規定することには満足できないし、こうした区別では構造と組織の区別が必要かどうかということさえ疑えるのである。

フェースはこのことに十分に気づいていたと見る事が出来る。彼は、組織的側面にみられる社会関係の目的遂行とその関係の維持に方向づけられた活動ということの中に、その目的の選択や方向の決定という相対的に自発的な活動が契機として含まれていることを主張し、組織が役割ということと深い関連をもってはいるが、それに尽きるものと考えられるべきではないというのである。⁽²⁶⁾ 逆にいえば、組織に含まれている選択と決定という契機を強調し、さらに元来社会関係の一定の形態を形態づけている原理(機制)である構造的枠内においても、いくつかの選択的場面、決定を必要とするような余地を残した場面が存在し得ることを認めているのである。

このように構造を、社会関係を形態づけている一般的な原理(機制)とし、その枠内における状況的な場面での選択と決定を含む適応の過程として組織を把えることによって、この両者を区別しているのである。さらにもう一つの両者を区別する指標としてフェースは時間という要素を取り上げている。⁽²⁷⁾ 簡単にいえば、構造も持続ということで時間と関係しているが、その場合の時間は構造にとって重要な変数とはなっていないのに対して、選択と決定とを本質とする過程である組織において、時間が重要な要素として入ってくるというのである。⁽²⁸⁾ つまり時間という要素が重要な要素となり得るか否かによって構造と組織とを区別したのである。この時間的要素

をめぐる問題については判断を保留したい。しかし一言附言しておくならば、この問題については少なくとも、時間的位相を空間的位相に、空間的位相を時間的位相に置換すること、「形成力」の問題、パースペクティブの問題などとの関連を欠いては論じられないであろう。

組織と構造の区別が有する理論的な意味をファースの挙げている例によってみてみよう。彼は社会人類学者によく知られているオジ——オイ関係を取り上げている。オジ——オイ関係の構造的表現は the mother's brother——the sister's son という一般的な形のものである。しかし経験的にはこのような構造的タイプについても様々な状況が存在し得る。つまり一人のオジに複数のオイ、複数のオジに一人のオイ、複数のオジと複数のオイ、オジが存在しない場合、さらには場合によっては正当なオジの地位と役割の放棄等々がある。⁽²⁹⁾ こうした現実的な状況への適応的あるいは処理的場面が組織的場面なのである。

しかもこのオジ——オイ関係においては、その間に交換されるものは（主としてオジからオイに譲渡されるものを中心にみれば）単なる物的財貨ばかりではなく、政治的権力、宗教的あるいは呪術的能力など様々である。そして前述のごとき組織的場面における譲渡は、常に可能的に選択と決定とを内包しているのであり、その場合その選択と決定は、構造的枠内でのことであるとはいってもやはり本源的には個人が行なうものなのである。

ここに挙げた例の検討からも明らかなように、ここにいう組織が、目的の選択と方向の決定ということを強調し主体としての個人の側から捉えられているものであることに注意しなければならないだろう。

さてファースは以上のように、構造と組織を明確に区分した上で、この両者の関係をみようとするのである。この節の冒頭部分に引用した中からそれに該当する部分を再び引用すれば、それは「社会的行為の組織的側面の分析は、構造的側面の分析にとって不可欠の補足的要素である。組織的

側面の分析はよりダイナミックな取り扱いの助けとなってくれるものであ
⁽⁸⁰⁾る。」という言葉の中に集約されているとあってよい。ここからダイナミッ
クな理論構築の鍵概念として組織を考えていることが理解されるのであ
る。では一体ファースはダイナミックということをどの様に考えていたの
だろうか。

ギリシャ語の語源から社会のダイナミックな理論が、社会的行為の power
mechanism に関するものでなければならぬことを指摘した後、ファースは、従来
の諸理論、スペンサー流の静態理論対動態理論、から静態分析
と構造分析の関係、さらに C. H. クーリー、G. ジンメルに始まる葛藤理論
(conflict theory)、最後にはマルキシズム矛盾論と葛藤理論の検討などを
行なっているが、彼の基本的な観念は、結局のところ non emergent dy-
namics と emergent dynamics の区別の上に置かれていたといえる。従
ってファースの動態理論は、構造内の変動を示すための社会動静 (social
movement) と構造変動 (structural change) との二つの事象の区別をも
つものとなっている。⁽⁸¹⁾ ということは、これをさらに敷衍していえば、社会
過程を枠づけている構造的な枠組そのものの質的な変動として構造変動を
理解しようとするものといえる。そしてこの点において同じ言葉を使いなが
らも、ラドクリフ＝ブラウンの構造変動とは顕著な相違をみることが
できるのである。

体系の構造的枠組の質的な変動を理解しようとする場合、まず考えられる
のは、一定期間の断絶を置いた後の社会のもつ構造の比較によってそれを
解明しようとする方法であろう。事実、しばしばこうした方法がダイナミ
ックな理論と同致されてきたのであるが、これに対してファースは、こう
した方法は真に通時的 (diachronic) というよりはむしろ二重共時的 (dual
synchronic) なものだと指摘し、こうした二重共時的比較論では、二つの
共時的な社会構造の形態的差異は明らかにされても、それをもたらした基
礎的な決定因や、二つの形態を結ぶ過程、および二つの形態の時間的推移

の中でその推移に作用し得る可能性をもつ条件的な要素が無視されざるを得ない事を批判している。⁽⁸²⁾ とするならば、さらに進んでいえば、二重共時論的比較論はあくまでも抽象的な形態の操作的な比較に止まるのであり、社会過程の人間介在性がまったく無視されているのではないかという指摘もまたなし得るだろうということを附言しておかなければならないだろう。

要するにファースの言うダイナミックな理論は、構造の質的変動——変動因と傾向性を含む——、変動の時間的推移過程、変動過程そのものへの人間介在性——組織が選択と決定という常に可能的に個人的な契機を含んでいたことを想起して欲しい——の三つを柱とするものと整理することが出来るのである。

ところですでにみたごとく構造とは、社会関係の、ひいては社会過程の形態を形態づけている原理（機制）の抽象的表現として理解された以上、構造からこれらのダイナミックな理論の三本の柱に関与する側面を導出することは不可能とされざるを得ない。ただかかる構造的原理の中に矛盾する側面、対立する側面を認めるに止めて、すべての過程としての部分を組織にあずけ、構造の維持、変動をこの組織の側面からみるというのがファースの構造と組織の関係づけ方である。こうした関係づけを基礎にしてファースは組織的変動（organizational change）という観念を導入している。そしてこの組織的変動ということを彼のダイナミックな理論の三本の柱と関連させて、最も重要なポイントとしているのである。

（五）

これまでイギリス社会人類学、とりわけ、マリノフスキー、ラドクリフ＝ブラウン、ファースの三人の動態的理論を取り上げ、それに考察を加えてきた。そしてそれを通して、社会の動態的理論をめぐるいくつかの問題、および動態的理論に関する方法的枠組の手掛をつかもうと試みてきた。

そこでここで若干の整理と本稿の暫定的な結論を記しておきたい。まずマリノフスキーの動態理論であるが、彼は一種の伝播論的立場をとり、そこには若干の問題性が存在していたが、彼の動態理論の要点が「心的現実」を重視する立場から、「心理的形成力」およびその形成力へ条件的なものとして作用する「歴史的残基の残存」の指摘に存した事は注意しておかなければならない。

これに対してラドクリフ=ブラウンのそれは、段階論を否定した一種の社会進化論であったとみることができる。彼はマリノフスキーとは異なり「社会的現実」重視の立場をとっていた。従って彼はまず、社会構造の分析とその比較を主要課題とし、社会変動を構造変動と定義し、それを動態理論と同致していた。しかし彼の場合、その構造論は有機体とのアナロジーに大きく依拠し、構造変動も構造の質的変動としてではなく、構造の多様化、あるいは複雑化として理解されていた。従って彼の動態論は具体的には敢えて大胆に言えば、プリミティブ（単一的）な社会とコンポジット（混合的）な社会の二類型の比較に止まらざるを得なかったといえるのである。しかしながら彼の「社会的現実」重視は、構造概念そのものの問題を含みながら、後の動態論へ大きな影響を与えるものであった。

構造概念の概念規定の反省を通してファースは、従来の構造、機能両概念のみでは社会の動態的理論へのアプローチができないとみて第三の概念として組織概念を提示している。

ファースは従来社会人類学の中で試みられてきた動態論への接近の大部分が通時的というよりも二重共時的 (dual synchronic) なものであることを指摘し、それとの比較検討を通して、ダイナミックな理論が、構造の質的変動——変動因と傾向性を含む——、変動の時間的推移過程、変動過程への人間介在性の三本の柱を含まなければならぬと考えたといえよう。そしてそのために組織的変動ということを手張したのである。この組織的変動はファースの場合、主として構造変動との関連のもとに論じられ

ている。また、組織ということが、選択と決定という人間的契機を含むものとして提示されていたことに注意を向けなければならない。何故ならここに変動への人間介在性へのアプローチへの一つの手掛を求めることが出来ると考えられるからである。

社会の動態的理論が、マリノフスキーの主張する「心的現実」とラドクリフ=ブラウンの重視する「社会的現実」の両者のいずれか一方でもそれを無視することは不当であろう。そこでやはり動態的理論の三本の柱を立てていると整理しておいたファースの所論を、とりわけそれらとの関係で提出されているとみることのできる組織的変動のもつ方法的意味を吟味してみることは、社会の動態的理論への方法的枠組に関する手掛を求めるための出発点として役立つのではないだろうか。

附記) 本稿の一部、第一節と第四節は、第45回日本社会学大会において「社会人類学における「組織」論について」——R. ファースの所論をめぐって——と題して発表した原稿を、コンパクトな形にまとめ、本稿の論述の目的にそって整理し、位置づけたものである。

また本稿は、慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要、第12号、1971、に発表した拙稿「社会変動論における組織的変動分析の意味と課題」——R. ファースの所論を中心として——の前章をなすものであるが、発表誌の性格を考慮して発表順序が逆になったことをおことわりしておく。

(1972年10月20日稿)

註

- (1) この場合、ここで上向的というのは、人間の生物学的欲求というものを基礎に家族、氏族、部族、国家、観念形態へと分析を積み上げる立場を意味し、下向的というのは、まず全体社会の「存在の必要条件」を措定し、そこから社会生活の諸部門の機能の分析をする立場の両者おのこの論理展開の特質を指しているにすぎない。
- (2) Levi-Strauss, C., "Problème de l'invariance en anthropologie", *Diogenes*, N° 31, 1960「人類学における不変の問題」石毛直道・稲浦嘉穎訳『ディオゲネス』1. 河出書房 1969, p. 94.
- (3) 詳しくは以下のものを参照して欲しい。Firth, R., *Essays on Social Organi-*

- zation and Values*, London, The Anthon Press, 1964, pp. 70-74.
- (4) Ibid., p. 71.
 - (5) Ibid., p. 71.
 - (6) Malinowski, B., *The Dynamics of Culture Change*, ed. by P. M. Kaberry, New Haven and London, Yale University Press, 1961, p. 1.
 - (7) 伝播主義理論に対する機能主義理論からする批判については様々に整理されている。例えば, Beatti, J., *Other Cultures*, London, 1964, 「社会人類学」蒲生正男, 村武精一訳, 社会思想社 1968 の中にもそれを散見できるし, 「文化人類学」堀喜望著, 法律文化社の中にもそれに関する整理をみることができ。ここでは, Malinowski, op. cit., pp. 1-40. に従って整理してみた。
 - (8) Malinowski, 1961, op. cit, p. 26.
 - (9) 例えば, 原始芸術と呼ばれる未開社会の芸術が 19 世紀, 20 世紀にかけてのヨーロッパの現代芸術に与えた影響を指摘することもできよう。
 - (10) Malinowski, B., 1961, op. cit., p. 22.
 - (11) Ibid., pp. 27-40. ここで言われている「残存」ということが, 伝播主義理論などが主張していた歴史の再構成の手掛としての「残存形態」という文化的要素の項目の孤立化と結びついているものではないことに注意して欲しい。
 - (12) 心理学的素因をめぐる問題や, それと文化(社会)変動との関連の問題, および心理学的人類学 (psychological anthropology) については以下のものを参照して欲しい。ごく最近のものについて上げれば以下の通りである。
Gluckman, G., and Eggan, F., "Introduction", *The Relevance of Models for Social Anthropology*, ed. by M. Banton, London, Tavistock, 1969.
Kennedy, J. G., "Psychological and Social Explanation of Witchcraft," in; *Man*, 1967, June. Gluckman, M., "Psychological, Sociological and Anthropological Explanation of Witchcraft and Gossips," in; *Man*, 1968, March.
 - (13) Radcliffe-Brown, A. R., "On Social Structure," *Structure and Function in Primitive Society*, London, Choen & West Ltd., 1952, p. 201.
 - (14) Ibid., p. 203.
 - (15) Radcliffe-Brown, A. R., "On the Concept of Function in Social Science," *Structure and Function in Primitive Society*, London, Choen and West, Ltd., 1952, p. 173. pp. 180-181.
 - (16) Radcliffe-Brown, 1952, op. cit., p. 8.

- (17) Ibid., pp. 8-9.
- (18) 例えばこれらの人々の著書をあげれば以下のものを構造概念にふれた重要なものとしてあげることができよう。
 Evans-Pritchard, E. E., *Social Anthropology and Other Essays*, New York, The Free Press, 1964.
 Leach, E. R., *Rethinking Anthropology*, London, 1961.
 Firth, R., *Elements of Social Organization*, London, Watts & Co., 1st ed., 1951.
 Nadel, S. F., *The Theory of Social Structure*, London, Cohen & West Ltd., 1957.
- (19) Bottomore, T. B., *Sociology*, London, George Allen & Unwin Ltd., 1971, pp. 43-44.
- (20) Firth, R., *Elements of Social Organization*, London, Watts & Co., 3rd ed., 1961, p. 20, p. 22, p. 33, p. 35.
- (21) Ibid., pp. 35-36.
- (22) Firth, 1964, op. cit., p. 3.
- (23) Firth, 1961, op. cit., p. 28.
- (24) Ibid., p. 35.
- (25) Radcliffe-Brown, A. R., 1952, op. cit., p. 11, より詳しくは以下のものを参照して欲しい。
 Radcliffe-Brown, A. R., *Method in Social Anthropology*, ed. by M. N. Srinivas, Chicago, The University of Chicago Press, 2nd Impression, 1966, pp. 166-177.
- (26) Firth, R., *Essays on Social Organization and Values*, London, The Anthon Press, 1964, p. 45.
- (27) Firth, R., *Elements of Social Organization*, London, Watts & Co., 3rd ed. 1961, p. 40, Firth, R., *Essays on Social Organization and Values*, London, The Anthon Press, 1964, pp. 54-58.
- (28) Firth, R., 1964, op. cit., p. 14, footnote, この脚註においてファースは、ネイデルの批判に答えるかたちで、かかる見解を展開しているのであるが、必ずしも説得的であるとは言い難い。さらにレヴィ=ストロースが、時間の問題はさ程重要なものとは考えないという見解を述べていることと考え合せるとき、この時間の要素の問題については、さらに詳細な検討を必要とするものと考えられる。

社会人類学における動態理論

- (29) Firth, R., 1964, op. cit., pp. 50-53.
- (30) Ibid., p. 35.
- (31) Firth, R., 1964, op. cit., pp. 7-29.
- (32) Ibid., p. 54.

On Dynamic Theories in British Social Anthropology

Toshimasa Hirana

I try to examine dynamic theories in British social anthropology, especially in works written by B. Malinowski, A. R. Radcliffe-Brown and R. Firth.

On the one hand, Malinowski criticized 'diffusionism' which had been insisted by W. T. Perry and E. Smith, denying their reconstruction of history and their inclination to the origin hunting, and so on. On the other hand, we can regard his theory as a kind of diffusion theory. But the characteristic which I think very important in his theory is his emphasis upon psychological realities or powers, i. e. psychological point of view, and his revaluation of surviving historical residues.

Radcliffe-Brown laid stress on the concept of structure, since he took a sociological point of view. He offered a comparative analysis of social structure. Thus he divided the study of social structure into three divisions. He said as follows: 'There is a third, the investigation of the processes by which social structures change, of how new forms of structures come into existence.' Both the concept of structure and the notion of structural change have far reaching theoretical influences.

Along these lines, Firth presents the organizational aspect of social relations in addition to structural and functional aspects. He thinks organizational aspect as it is the necessary complement to the analysis of the structural aspect and it helps to give a more dynamic treatment. Furthermore he points out that the organizational aspect implies personal evaluations and selections. In relation

to what mentioned above, he makes clear the difference between structural and organizational change. Therefore we must examine in the first place the organizational change because of its characteristic of *humanistic coefficient*.